



日本地球化学会ニュース

No.185 May 2006

Contents

2006年度日本地球化学会年会のお知らせ ⁽²⁾	2
学会からのお知らせ	4
2006年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集	
2006年度第2回鳥居基金助成の募集	
地球化学会 HP・リニューアルオープン	
学会誌「地球化学」の電子投稿開始	
学会関係報告	5
2005年度第2回鳥居基金助成実施報告	
研究会などのお知らせ	6
独立行政法人国立環境研究所公開シンポジウム2006『アジアの環境と私たち もう無関心ではいられない』(京都：6/4, 東京：6/18)	
International joint projects: Hong Kong, India and Japan	
第2回 オートアナライザーシンポジウム開催のご案内(6/9)	
サマー・サイエンスキャンプ2006 参加者募集	
人事公募	9
東京海洋大学海洋科学部海洋環境学科水圏環境化学講座教授(5/31〆切)	
東京農工大学大学院共生科学技術研究院環境資源共生科学部門教授(6/30〆切)	
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻宇宙惑星科学講座教授(6/30〆切)	
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻助教授(7/10〆切)	
院生による研究室紹介 No.2	11
北海道大学大学院理学院自然史科学専攻 角皆・中川研究室	
女性研究者に聞く No.2	13
産業技術総合研究所地質調査総合センター地質情報研究部門・研究部門長 富樫茂子	
書評	14
訃報	16
年会講演作成上の注意	17

2006年度日本地球化学会年会のお知らせ(2)

主催 日本地球化学会

共催 日本化学会

後援 日本大学文理学部

会期 2006年9月13日(水)～15日(金)

会場 日本大学文理学部

(東京都世田谷区桜上水3 25 40)

京王線・下高井戸駅・桜上水駅下車, 東急世田

谷線下高井戸駅下車 徒歩8分 ([http://www.](http://www.chs.nihon-u.ac.jp/index-con/info_f.html)

[chs.nihon-u.ac.jp/index-con/info_f.html](http://www.chs.nihon-u.ac.jp/index-con/info_f.html))

内容 一般講演(口頭発表及びポスター発表), 課題講演(口頭発表及びポスター発表), 夜間小集会, 総会, 学会賞受賞講演, 懇親会。

若手優秀ポスター賞 きわめて優れたポスター発表を行なった日本地球化学会学生会員に授与します(受賞者発表は懇親会の際に行ないます)。

一般講演発表分野 大気/降水・岩石/地殻・鉱床・有機物・生物・陸水・温泉/熱水・地球外物質・海洋・堆積物・環境・その他地球化学全般に関わる講演を募ります。口頭発表は討論を含め15分の予定で, 多くの人が発表できるように一人一件とします。二件目からはポスター発表をお願いします。

課題講演テーマ(本年は下記の5テーマに関連する講演を募ります。)

課題講演 - 1 東アジア・太平洋域におけるエアロゾルと関連気体成分の地球化学

課題講演 - 2 環境地球化学の新技术・新指標

課題講演 - 3 固体地球の脱ガスに係わる地球化学

課題講演 - 4 核・放射化学と宇宙・地球化学の接点

課題講演 - 5 地球化学の立場からみた新しい科学教育

課題講演 - 1 東アジア・太平洋域におけるエアロゾルと関連気体成分の地球化学

趣旨: 東アジアでの人間活動に伴いエアロゾルとその前駆体の排出量は引き続き増加傾向にある。この数年間, ACE-Asia をはじめエアロゾルに関する国内外の研究プロジェクトが東アジア・北太平洋域にて実施された。本課題講演では, 中国, 韓国, 日本など東アジアおよびその影響を受ける北太平洋における有機および無機エアロゾルと関連気体成分に関する研究発表を行うとともに, 今後のエアロゾル研究の課題について議論を深める。多くの発表申し込み

を募る。

コンピーナー: 河村公隆(北大低温研), 畠山史郎(国立環境研), 植松光夫(東大海洋研)

課題講演 - 2 環境地球化学の新技术・新指標

趣旨: 環境分析はその社会的な重要性から分析手法の標準化やデータ蓄積が進み, 地球化学的な視点からは重要視されないことが多い。しかし一方でデータの単純な蓄積では解決が難しい課題が数多く顕在化しつつある。本セッションではルーチン的な環境分析ではなく, それを開発することで環境化学の諸問題の解決に貢献出来る可能性のある新しい分析手法や新しい指標に関する研究課題を広く集め, その将来展望や有用性について議論する。現状で手法や指標として確立されたものではなく, むしろ将来的な発展性が期待される萌芽的で意欲的な手法や指標に関する講演を広く募集する。対象領域は「環境」とする以外は特に限定せず, 広い視野で議論する。

コンピーナー: 角皆 潤(北大)・高橋嘉夫(広大)・谷本浩志(環境研)

課題講演 - 3 固体地球の脱ガスに係わる地球化学

趣旨: 地震や断層活動, 火山や温泉活動, そして海底熱水・湧水活動などを通じて, 固体地球から大気へと希ガスを含む二酸化炭素などの揮発性元素が連続的あるいはカタストロフィックに放出されている。これらの成分が長い地質時代に蓄積して大気や海洋を形成した可能性が1950年代に示唆されてからすでに50年が経過した。本課題講演では, このような脱ガス現象を安定および放射性的揮発性元素の存在度や安定同位体比, 脱ガス量(フラックス)などの観測・実験, 既存のデータに基づく数値シミュレーションなどの理論的研究を募り, 新しい地球化学の進展に資することを目的とする。

コンピーナー: 野津憲治(東大理)・佐野有司(東大海洋研)

課題講演 - 4 核・放射化学と宇宙・地球化学の接点

趣旨: 宇宙化学や地球化学では核化学や放射化学的現象や手法に関連する研究が少なくない。そのようななかで, 本課題講演ではとくに, 太陽系形成初期に存在していた消滅核種, 及び宇宙線と宇宙・地球物

質との核反応によって生成する宇宙線生成核種を用いた宇宙・地球化学に焦点をあてるが、それ以外にも、たとえば分析手法なども含めて、広く核・放射化学と宇宙・地球化学の接点となるような講演を募集する。

コンピーナー：海老原充（首都大学東京）、永井尚生（日大文理）

課題講演 - 5 地球化学の立場からみた新しい科学教育

趣旨：現在、日本人の理科離れが問題になっている。日本地球化学会も所属する日本地球惑星科学連合でも、小学校から高等学校までの理科教育に関する内容の提言を文部科学省に提出（予定）している。その提言の中では、最近の環境問題に対応できる地球人を育てる理科教育を求めている。そのためには、地球化学の知識を取り入れた新しい科学教育・地学教育が教育課程や生涯教育に必要であり、日本地球化学会に対する期待も高まっている。本セッションにおいて、どのような地球化学の教育が必要なのか議論し、日本地球化学会としての教育に関する方向性を考える内容にしたい。

コンピーナー：瀧上 豊（関東学園大学）・津野 宏（横浜国立大学）

講演申込受付 年会 web page (<http://www.geochem.jp/meeting>) からのみ受け付けます。6月7日(水) 14時開始、6月28日(水) 14時〆切。web pageからの申込が困難な場合は、下記の間合せ先に、〆切の1週間前までにご連絡ください。

講演予稿原稿受付 年会 web page (<http://www.geochem.jp/meeting>) からのみ受け付けます。7月12日(水) 14時開始、7月26日(水) 14時〆切。講演要旨の書き方は、本ニュース最後にある「講演要旨作成上の注意」または上記 web page をご覧下さい。web pageからの申込が困難な場合は、下記の間合せ先に、〆切の1週間前までにご連絡ください。

参加予約申込 年会 web page (<http://www.geochem.jp/meeting>) から、指示に従って申し込んで下さい。6月7日(水) 14時開始、8月30日(水) 14時〆切。

参加登録費（講演要旨集1部と送料を含む）予約申込：主催・共催学会員5,000円、学生会員3,000円、会員外7,000円、会員外学生4,000円。当日受付：主催・共催学会員6,000円、学生会員4,000円、会員外

8,000円、会員外学生5,000円。

懇親会 9月14日夜間、年会会場にて。予約5,000円（学生3,000円）、当日6,000円（学生4,000円）。

講演要旨集（当日販売）：3,000円/部（郵送の場合：3,500円/部）

予約申込による参加登録費・懇親会会費・講演要旨集代金の支払い方法 参加登録費、懇親会参加費、要旨集代金のお支払いは、年会 web page (<http://www.geochem.jp/meeting>) から、クレジットカードによるオンライン決済でお願いいたします。なお、クレジットカードは本人名義でなくとも使えます。クレジットカードによるお支払いが困難な場合は、下記の年会問い合わせ先に、締め切りの1週間前までにお問い合わせください。年会当日の参加登録費のお支払いは現金となります。領収書を必要とする場合は、年会当日に受付にお申し出ください。

併設展示 関連機器メーカーその他による展示会を併設します。詳細についてはお問い合わせください。

その他 実行委員会では宿泊/航空券等の斡旋はいたしません。各自お早めに手配ください。

問合せ先

〒164 8639 中野区南台1 15 1

東京大学海洋研究所海洋無機化学分野 蒲生俊敬

Tel : 03 5351 6451, Fax : 03 5351 6452

E-mail: nenkai2006@geochem.jp

2006年度日本地球化学会公開講演会のお知らせ

日本地球化学会では、年會に先立ち、市民向けの公開講演会を開催します。

テーマ：「深海底から地球の未来を求めて 掘削船「ちきゅう」が拓く海底下の世界」

主催：日本地球化学会

日時：9月10日(日) 14:00~16:00

会場：日本大学文理学部百周年記念館国際会議場
世田谷区桜上水3 25 40

京王線・下高井戸駅・桜上水駅下車、東急世田谷線下高井戸駅下車 徒歩8分 (http://www.chs.nihon-u.ac.jp/index-con/info_f.html)

参加費：無料。どなたでもお気軽にご参加ください。

対象：中学・高校生を中心に小学校高学年から一般市民まで。

プログラム

1. 地球深部探査船「ちきゅう」が導く「地球」の新たな姿

徐 垣（海洋研究開発機構高知コア研究所所長）

平成17年9月、その姿を横浜港大黒埠頭に表した地球深部探査船「ちきゅう」は、全長210 m、高さ70.1 m、ライザー掘削時において最大稼働水深2,500 m、掘削全長10,000 mの掘削能力を有する科学掘削を目的とする掘削船である。その掘削能力とともに、本船は「洋上研究所」と呼ばれるほど充実した研究機器と研究環境を有する。本講演では、この「ちきゅう」を使って、科学者が今後どのような研究を行うのか、また、この掘削船でどこまでの分析や解析が行えるのか等を紹介したい。

2. 深海底から地球を探る

川幡穂高（東京大学海洋研究所教授）

日米欧が主導する国際プロジェクト「統合国際深海掘削計画（IODP）」では、日本が開発した巨大深海掘削船「ちきゅう」等を利用して水深2,500 m（最終的には4,000 m）の深海底を掘削する。そこには、未知の地下生命圏が広がっていると推定され、堆積物の中には地球がこれまで経験してきた過去の気候・環境変動が沢山記録されている。また、日本周辺海域では、巨大地震の仕組みを理解するなどの地球変動メカニズムの解明が期待されている。さらに、新しい、そして未来エネルギーとして期待されるガス・ハイドレートの探索なども行なわれる。これらは地球・生命科学の創成とその統合的な理解に通じ、最終的に「新しい地球観」がもたらされる事が期待される。本講演では、IODPの現状と今後の展開を説明し、「地球の本質を知りたい」と感じる若者や市民の皆さんに新しい地球科学・地球生命科学の世界を知って頂く機会としたい。

問合せ先：

〒164 8639 東京都中野区南台1 15 1
東京大学海洋研究所 佐野有司
Tel：03 5351 6823，Fax：03 5351 6824
E-mail: nenkai2006@geochem.jp

学会からのお知らせ

2006年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集

地球化学研究協会より、「三宅賞」および「奨励賞」候補者の推薦を依頼します。下記の要領で応募して下さい。申請書類は、地球化学研究協会のホームページからダウンロードして下さい。学会を通じての応募を希望される場合には、庶務幹事（植田千秋）までご連絡下さい。個人で直接応募も可能です。

1. 三宅賞

対象：地球化学に顕著な業績をおさめた研究者

表彰内容：賞状、副賞として賞牌および賞金30万円、毎年1件（1名）

2. 奨励賞

対象：推薦締切日に35才以下で、地球化学の進歩に優れた業績を挙げ、将来の発展が期待される研究者

表彰内容：1件10万円、毎年1件（1名）

3. 応募方法：申請書に略歴、推薦理由、研究業績などを記入し、主な論文10編程度（三宅賞）、2編程度（奨励賞）をそえて、下記のあて先へ送付して下さい。

なお、応募書類は、三宅賞等選考のためにのみ選考委員会で用いられます。

4. 締切日：2006年8月31日

5. 地球化学研究協会ホームページ：

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gra/>

6. 応募先：

〒100 8212 東京都千代田区丸の内1 4 5

三菱 UFJ 信託銀行株式会社

リテール統括部受託財産管理ライン

（公益信託）地球化学研究協会 江川

7. お問合せ：庶務担当まで、電子メール

（t-sagi@ka5.koalanet.ne.jp）でお願いします。

2006年度第2回鳥居基金助成の募集

2006年度第2回鳥居基金助成の応募の締め切りは2006年7月末日となります。本学会ホームページに応募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。なお今回の助成の対象は、2006年10月から2007年9月までの1年間に実施される海外渡航及び国内研究集会となりますのでご注意ください。

申請手続

応募者は、Vol 39特別号（会員名簿）の89、90ページに掲載されている申請書（(1) - Aまたは(1) - B）を所定の期日までに下記に提出する。参考となる資料（海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等、国内研究集会については集会の案内・概要等）を添付すること。

提出先：植田千秋（庶務幹事）

〒560 0043 大阪府豊中市待兼山町1 1
大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻
Tel : 06 6850 5798 , Fax : 06 6850 5480
E-mail: shomu@geochem.jp

地球化学会 HP・リニューアルオープン

4月1日より、リニューアルされた日本地球化学会ホームページが公開されました。情報は漏らさず、しかも「見やすく」を念頭に作り替えたつもりでいます。ホームページアドレスは、<http://www.geochem.jp/>と、従来と変わりません。

会員登録情報の変更・入会等もウェブ上で処理できるようになっています。

一度ご覧頂き、修正点等ありましたら、お知らせいただきたく存じます。宜しく願い申し上げます。

「公募」や「シンポジウム開催」「研究室訪問」等々、ホームページに掲載したい記事がありましたら、news-info@geochem.jp まで、電子メールに添付してお送り下さい。

学会誌「地球化学」の電子投稿開始

「地球化学」の原稿は、郵送による投稿のほか、電子メールでの投稿も可能となりました。なお、既に投稿されている原稿に対しては、従来通りの方法で審査と編集作業を行うこととなります。投稿と査読などの手順を以下に示しておきます。なお、これは新しい投稿規定を策定するまでの暫定的なものであり、来年までに原稿の投稿規定を改訂することを予定しております。電子投稿でなく、従来のハードコピー原稿による投稿をされる場合は、これまでの投稿規定（「地球化学」40巻1号や、日本地球化学会 web page に記載されているもの）に従って原稿をお送りくださるようお願いいたします。

1. 原稿は、表紙・英文要旨・要旨和訳・本文・参考文献・表・図の説明・図から成り、原稿の作成要領は従来の投稿規定に従う。

表紙には、1)表題、2)著者名、3)所属、4)連絡責任者の氏名・所属・住所・電話番号・電子メールアドレス、5)キーワード、6)欄外見出し（短縮した表題）を記載する。また、要旨和訳は印刷されないが、編集作業に用いるので、必ず添付する。

2. 投稿規定に従って作成された原稿を、MS Word で読むことのできる形式、またはPDF形式で保存する。この時点で、図は判読可能な程度に画質を落とすもよい。原稿は可能な限りひとつのファイルとする。ただし、一度に送信できないほどファイル容量が大きくなる場合には、図表は別のファイルとしてもよい。

3. 原稿は添付ファイルとして編集長宛（chika@geochem.jp）に送信する。メールの表題は、「地球化学投稿」とする。また、メール本文に、表題、著者名、添付ファイルのリスト、原稿を作成したソフト名とバージョン（Windows と Macintosh の区別も含む）、ファイルの保存形式を明記する。

4. 投稿された原稿について、編集長からメールでの受付の連絡をもって、投稿が完了したものとする。また、受付後の査読作業や著者との連絡も、原則として電子メールを通して行う。しかし、査読意見が郵送されてきた場合には、この限りではない。

5. 受理後の最終原稿は電子メールで受け付けるが、手書きの図表や、メールでは送れない大容量のファイルを保存したCD-Rなどの電子媒体は、編集長に郵送する。受理後の印刷に関わる作業は従来通りである。

学会関係報告

2005年度第2回鳥居基金助成実施報告（TE 48）

氏名（所属）：宮入陽介（東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻博士課程）

助成：海外渡航（英国）

課題：19th International Radiocarbon Conference
における論文発表

この度、日本地球化学会より「鳥居基金」の資金援

助をいただき、英国のオックスフォードで開かれた 19th International Radiocarbon Conference に参加し、論文発表を行いました。その実施結果についてご報告いたします。

本会議は、オックスフォードの Keble College において、4月3日より7日の5日間に渡り行われました。講演総数は274件で、12の個別セッションにわかれて行われました。University of Oxford の College の一つである Keble College に宿泊をし、朝の9時から午前のセッションが始まり、途中、食事などを挟みつつ、夜の22時15分にポスターセッションが終わる、といった盛りだくさんの日程での会議でした。

12の個別セッションの中で、参加者の注目が集まったのは“Calibration”のセッションであったように思います。その話題の中心は2万年より古い年代の較正法をどうするか？といった問題でした。

もう一つ印象に残ったことは、“LSC and GPC”セッションの規模の小ささでした。 ^{14}C 濃度の測定手法にはLSC(液体シンチレーションカウンター)やGPC(気体比例計数管)などの β 線計測器をもちいる方法と加速器質量分析器を用いるAMS法とがあるのですが、今回の“LSC and GPC”セッションでは口頭発表1件、ポスター発表5件と、かなりごんまりとしたものでした。このことは、Radiocarbon研究の趨勢はAMSの利用に移ったのかなという印象を強くし、私はLSCとAMSの両方を研究に使った経験があるものですから、一抹の寂しさを感じました。

私自身は“Terrestrial”のセッションで、“Searching for a potential of the Red Thermo Luminescence for dating of tephtras with using AMS radiocarbon dating”というタイトルでポスター発表を行いました。この発表は、支笏第一テフラの埋没林から採取した、多数の炭化木を放射性炭素年代測定法で高精度年代測定をし、同地点で採取されたテフラ中の石英を用いた赤色熱ルミネッセンス年代測定の結果と比較を行った研究です。支笏第一テフラはその年代が約42 kaと ^{14}C 年代測定の適用限界に近く、先行研究の年代値は大きくばらついているなど、年代学的に問題の残るテフラでした。今回はそのテフラの ^{14}C 年代の再測定の結果を用いて、近年精度向上の著しい赤色熱ルミネッセンス年代測定法の火山噴火年代測定への適用可能性について議論しました。私の研究に興味を示してくれた方も多く、一人の方がポスターセッションの開始時刻前から私のポスターの前で待っていてくださ

ったことには、大変うれしく思いました。

Radiocarbon という私の研究の核となるツールの国際会議でしたので、この会議には、今回初めて出席したのですが、他のどの講演も興味深く、約1週間の会議でしたが、時間のたつのも忘れ、あっという間に1週間が過ぎたという印象です。

放射性炭素研究の国際会議において発表をすることで、研究の最前線に触れ、多く年代学の研究者と議論できたことは大変良い経験になりました。今回海外派遣を決定して下さった日本地球化学会の皆様に深く感謝いたします。



研究会などのお知らせ

独立行政法人国立環境研究所公開シンポジウム2006

『アジアの環境と私たち もう無関心ではいけない』

国立環境研究所では、毎年6月の環境月間にあわせて、公開シンポジウムを開催しています。今年は自然と社会経済活動を通じたアジア地域とわが国の間の相互作用、すなわちわが国の環境がアジア地域から受ける影響、また逆に私たちの暮らしがアジア地域の環境に与える影響について、これまでの国立環境研究所の研究成果をもとにわかりやすくご紹介します。

1. メインテーマ：「アジアの環境と私たち もう無関心ではいけない」
2. 内容：大塚柳太郎理事長による基調講演および国境を越える廃棄物や大気汚染の問題、温暖化がアジアの生態系や人の健康に与える影響に関する講演4件と研究者自らがパネルを用いて直接、対話しながらご説明するポスターセッションを予定
3. 日時・会場
 - (1) 京都会場
開催日時：平成18年6月4日(日) 12:00~17:00
開催場所：シルクホール(京都市下京区四条通室町東入ル 京都産業会館8階)
定員：約700名
アクセス：京都市営地下鉄烏丸線四条駅・阪急京都線烏丸駅より徒歩3分

(2) 東京会場

開催日時：平成18年6月18日(日) 12:00~17:00

開催場所：メルパルクホール
(港区芝公園2-5-20)

定員：約1,200名

アクセス：JR浜松町駅より徒歩10分 / 都営三田線芝公園駅より徒歩2分 / 都営浅草線・大江戸線大門駅より徒歩4分

公開シンポジウムに関する情報は随時次のwebページに掲載いたします。

(<http://www.nies.go.jp/sympo/2006/index.html>)

また、昨年度開催の公開シンポジウム2005の様子は、動画で次のwebページに掲載しています。(<http://www.nies.go.jp/sympo/2005/index.html>)

参加御希望の方は、参加希望会場(東京・京都)、住所、氏名、年齢、職業、連絡先(電話番号、FAX番号、E-mailアドレス等)を明記の上、下記あてにE-mail、FAX又は葉書にてお申し込みください。折り返し、参加票をお届けします。また、上記webページからも参加登録が可能です。参加費は無料です。

国立環境研究所公開シンポジウム2006登録事務局

〒105-0003 東京都港区西新橋1-7-2

虎ノ門高木ビル ㈱インターグループ内

Tel : 03 3597 1129, Fax : 03 3597 1097

E-mail: nies2006@intergroup.co.jp

International joint projects: Hong Kong,

India and Japan

The Royal Society is inviting applications for its international joint projects for research in Hong Kong, India and Japan. The programme is designed to enable international collaboration by providing a mobility grant for researchers to cover travel, subsistence and research expenses. The collaboration should be based on a single project including two teams or individuals: one based in the UK and the other based outside the UK. All sciences covered by the society are eligible.

Joint Projects are intended for UK and overseas scientists of proven research ability. Project leaders must be of at least postdoctoral status or equivalent.

UK collaborators should be resident within the UK. EU citizens may apply provided they hold a permanent position in the UK. Non-EU citizens may apply provided they have held a permanent position at a UK institute for at least three consecutive years, exclusive of any period in full time education.

The scheme runs for two years for joint projects with researchers based in Hong Kong and Japan. Joint projects with Indian researchers may last for up to three years. Grants provides a maximum of £6,000 per year. This may be used to claim the costs of travel and subsistence.

Deadline: 15 March, 15 June, 15

September and 15 December annually

International Joint Projects

Royal Society

6-9 Carlton House Terrace

London SW 1 Y 5 AG

United Kingdom

Tel: +442074512555

Fax: +442079302170

Email: international.jointprojects@royalsoc.ac.uk

<http://www.researchresearch.com/getPage.cfm?pagename=fundingOpRecord&lang=EN&type=default&id=159000>

第2回 オートアナライザーシンポジウム開催のご案内

オートアナライザー協会主催による、第2回オートアナライザーシンポジウムのお知らせです。オートアナライザーは化学分析の自動化装置として、環境や、化学、農水産分野を中心に内外の基幹の検査センター等で多く利用されている気泡分節を用いたシステムで、今日においても、行政機関や顧客ニーズに対応すべく改良を重ね、多方面から高く評価されています。

オートアナライザー協会は、オートアナライザーを通して、水質分析の高度化および水質保全に資するための技術支援と会員相互の情報交換の場を提供することを目的としており、第2回目の開催となる今回のシンポジウムでは、現在注目されている各分野でのオートアナライザーの活用事例が7テーマ発表されます。

.....開催要項

開催日：平成18年6月9日(金)

時間：13：00～17：55

場所：梅田スカイビル タワーウエスト36階
『スペース36』

* JR 大阪中央北口より9分

* 地下鉄御堂筋線より9分

* 阪急梅田駅より9分

参加料：無料（事前登録制）

お申し込み方法：

インターネットで <http://www.bl-tec.co.jp/aasympo2.htm> にアクセスしてお申し込みください。

* 定員になり次第締め切らせて頂きます。

* お申し込み後『参加票』をお送り致します。

交流会会場：同フロア

時間：18：00～20：00

ご参加料：1,000円

* ご参加料は、当日会場受付にてお支払いください。

* 事前登録制です。

シンポジウムお申し込み / お問い合わせ先

オートアナライザーシンポジウム開催事務局
(ビーエルテック株式会社内)

担当 木村 seminar@bl-tec.co.jp

連絡先：東京都中央区日本橋大伝馬町14-15
マツモトビル4F

Tel：03 5847 0252，Fax：03 5847 0255

URL <http://www.bl-tec.co.jp>

.....プログラム

第2回 オートアナライザーシンポジウムプログラム

13：00～13：10 挨拶

オートアナライザー協会会長 前田広人

13：10～14：30 基調講演

再生可能、しかし限りあるもの：人口増加への淡水供給 (Renewable, but not inexhaustible: The freshwater supply for a growing human population)

ドイツ、コンスタンツ大学 (University of Constance, Germany)

マックス M. ティルター (Max M. Tilzer)

14：30～15：00

連続流れ分析装置の導入による業務効率の向上

N, P, CN, Ph, F の分析

株式会社ニッテクリサーチ 環境技術部

環境分析課水質分析係 吉川幸司

15：00～15：30

採水容器と試料安定性 容器の材質によって保存性はどうか

サントリー株式会社 品質保証本部

安全性科学センター 澤田美穂

15：30～16：00 休憩

16：00～16：40

閉鎖性海域の栄養塩レベルと環境管理のあり方

広島大学生物圏科学研究科

名誉教授 松田 治

16：40～17：10

精度の良い測定のために

財団法人秋田県総合保健事業団

児桜検査センター次長 菅原 昇

17：10～17：40

畜産分野における窒素分析 乳牛における窒素代謝

独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構畜産草地研究所畜産環境部

排泄物制御研究室農学博士 甘利雅拓

17：40～17：55

連続流れ分析の公定法をめぐる情勢

ビーエルテック株式会社

R&D センター長 埜村朋之

サマー・サイエンスキャンプ2006 参加者募集

独立行政法人 科学技術振興機構

財団法人 日本科学技術振興財団

先進的な研究施設や実験装置等を有する日本各地の大学・公的研究機関・民間企業(33会場)で夏休みの3～4日間高校生等を受け入れ、ライフサイエンス、情報通信、環境、ナノテクノロジー・材料、エネルギー、社会基盤、製造技術、(宇宙・海洋等の)フロンティア、農学、防災、地球科学等の分野において、第一線で活躍する研究者・技術者等から直接講義や実習指導が受けられる科学技術体験合宿プログラムのご案内です。募集要項はWEBサイトから入手可能です。

開催日：2006年7月25日～8月25日の夏休み期間中

2泊3日もしくは3泊4日

参加費：10,000円

応募締め切り：6月27日(火) 必着

主催：独立行政法人 科学技術振興機構

事務局：財団法人日本科学技術振興財団内

サイエンスキャンプ事務局

Tel: 03 3212 2454, Fax: 03 3212 0014

URL: <http://ppd.jsf.or.jp/camp/>

(募集要項、プログラム等の詳細は、上記ホームページをご覧ください。)



人事公募

東京海洋大学海洋科学部海洋環境学科水圏環境化学講座教授・1名

1. 募集人員：教授 1名
2. 所属：海洋科学部海洋環境学科水圏環境化学講座
3. 担当教育研究分野：
海洋環境中における生物由来の有用化学物質の構造と機能の解明およびそれらの有効利用，または生態系に影響を及ぼす環境汚染物質の挙動の解明及び環境保全について，化学の立場から教育研究を行なう。
4. 担当授業科目等：

【学部】

1～3年次：有機化学，その他の学科共通科目・基礎教育科目・専門科目（化学，海洋科学通論，海洋科学入門，分析化学実験，水圏環境化学実験，フレッシュマンセミナー，海洋環境学実習など）を分担する。

4年次：セミナー，卒業論文

【大学院】

博士前期課程：生命化学または有機構造解析，海洋化学特別演習，海洋化学特別実験，修士論文などの他，今後開設予定の環境保全化学に関する授業科目を分担する。

博士後期課程：水圏生態化学特論，海洋環境学合同セミナー，海洋環境学特別研究，博士論文を担当する。

5. 応募要件：
 - 1) 博士の学位を有すること。
 - 2) 担当教育研究分野に関する研究業績を有すること。

と。

- 3) 学部での講義，実験および実習を担当できること。
- 4) 大学院での講義，実験，教育研究指導を担当できること。
- 5) 年齢 45～55歳程度が望ましい。
6. 応募締切：平成18年5月31日(水) 必着
7. 採用予定：決定後，できる限り早い時期
8. 提出書類（A4版）：
 - 1) 履歴書
 - 2) 業績目録：著書 学術論文 参考論文（総説など） その他(特許など)に分けて，各々を最新のものから年代順に遡って列記
 - 3) 研究資金（科学研究補助金，受託研究費，共同研究費，奨学寄附金，その他）の獲得状況：過去10年間に研究代表者として獲得した資金に関して，申請課題，助成機関，期間，金額を列記
 - 4) 学術論文の別刷り：代表的な論文10編（コピー可）
（なお，選考の進展に伴い，業績目録に列記した全てのものを提出して戴くことがあります。）
 - 5) 現在までの教育および研究成果の要約（2,000字程度）
 - 6) 着任後の教育および研究に対する抱負（2,000字程度）
9. その他：
 - 1) 応募書類は返却しません。
 - 2) 選考の進展に伴い面接を行なうことがありますが，交通費は自己負担とします。
 - 3) 健康診断書（国立またはそれに準ずる機関による）の提出をして戴く場合があります。
10. 書類提出先：
〒108 8477 東京都港区港南4 5 7
東京海洋大学・海洋科学部・海洋環境学科教授
浦野直人宛
（封筒には「水圏環境化学講座教員応募書類」と朱書きして，必ず郵便書留とすること。）
11. 照会先：
浦野直人
Tel: 03 5463 0588, Fax 03 5463 0589
E-mail: urano@s.kaiyodai.ac.jp
12. 参考：
本講座の人員構成

教授 5 名（浦野直人，兼廣春之，林哲仁，本公募，別公募準備中）
助教授 5 名（石田真巳，遠藤英明，神田穰太，佐藤博雄，永井宏史）
助手 3 名（榎牧子，高橋美穂，任恵峰）の人員構成です。

東京海洋大学公式ホームページ
<http://www.kaiyodai.ac.jp/Japanese/inden.html>
を参考にして下さい。

東京農工大学大学院共生科学技術研究院環境資源共生科学部門教授・1名

1. 募集人員：教授 1名
2. 所属：東京農工大学大学院共生科学技術研究院環境資源共生科学部門（東京農工大学大学院農学府物質循環環境化学専攻および農学部環境資源科学科の教育を担当）
3. 専門分野：無機地球化学
4. 担当科目：物理化学，環境分析化学，無機地球化学特論，環境資源科学実験（化学系），環境資源科学実験（地学系）の講義・実験
5. 応募資格：
博士の学位を持ち，30報以上の原著論文を発表していること。教育研究に熱意があること。45～55歳が望ましい。
化学系分野を背景にした環境資源科学系分野の教育研究に意欲と実績を持ち，上記の科目等の授業担当が可能な者を公募する。又，地学系実験の担当も含まれるので，分析化学系，無機化学系，地球化学系，等が望ましい。農学部という状況を踏まえ，基礎的で，教育的な，且つ，意欲的な人材を求めたい。新たな分野を切り開く意欲的な人材が応募することを望む。
6. 着任時期：採用決定後できるだけ早く
7. 提出書類：
 - (1) 履歴書
 - (2) 論文リスト
 - (3) 主要論文 5 編の別刷又はコピー
 - (4) これまでの研究経過の概要
 - (5) 今後の研究計画
 - (6) 教育に関する方針
8. 応募締切：平成18年 6 月30日(金) 消印有効
9. 書類送付・問い合わせ先：

〒183 8509 東京都府中市幸町3 5 8
東京農工大学大学院共生科学技術研究院
環境資源共生科学部門
資源物質科学分子ダイナミックス学 牛木秀治
Tel & Fax : 042 367 5616
E-mail: ushiki@cc.tuat.ac.jp
応募書類は簡易書留として郵送のこと

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻宇宙惑星科学講座教授・1名

1. 募集人員：教授 1名
2. 所属講座：宇宙惑星科学講座
3. 公募分野：宇宙空間・天体および天体周辺における物理的素過程・物質輸送過程・エネルギー変換過程などを対象とした研究分野。当該講座の教員と協力して教育・研究を積極的に推進する方。
4. 着任時期：決定後出来るだけ早い時期。
5. 提出書類：
 - (a) 履歴書
 - (b) これまでの研究概要（1,600字程度）
 - (c) 研究論文リスト（査読論文とその他を区別してください）
 - (d) 主な原著論文の別刷またはコピー（5編以内）
 - (e) 今後の研究・教育の計画・抱負（1,600字程度）
 - (f) 自薦の場合は，応募者に関して御意見を頂ける方2名の氏名及び連絡先（住所，電話，電子メール）
 - (g) 他薦の場合は，推薦書の他に，前記事項(a)～(e)の概要がわかる書類
6. 応募締切：平成18年 6 月30日(金) 必着
7. 提出先：
〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻長
宮本正道
Tel : 03 5841 4543
E-mail: miyamoto@eps.s.u-tokyo.ac.jp
8. 問合せ先：
〒113 0033 東京都文京区本郷7 3 1
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
星野真弘
Tel : 03 5841 4584
E-mail: hoshino@eps.s.u-tokyo.ac.jp
9. その他：
封筒の表に「宇宙惑星科学講座教授公募書類在

中」と朱書きし、簡易書留で送付してください。当該講座の教員リストおよび当該講座の概要など、詳しくは当専攻 WEB: <http://www.eps.s.u-tokyo.ac.jp/>をご覧ください。

東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻助教授・

1名

1. 募集人員：助教授 1名
2. 教育・研究分野及び応募資格：
化学をベースとして、物質科学的アプローチから広い意味での環境科学、地球科学等の新しい研究領域を開拓する意志を持ち、
 - (1) 教養学部前期課程（1, 2年生）の化学の講義・実験、
 - (2) 教養学部後期課程（3, 4年生、広域科学科）における講義・実験実習、
 - (3) 大学院（広域システム科学系）における教育・研究指導、を担当できること。
3. 着任予定時期：決定後できるだけ早い時期
4. 提出書類：
 - (1) 履歴書（要写真）
 - (2) 業績リスト（査読付原著論文、総説・著書、その他等に分類）
 - (3) 論文別刷（5編）
 - (4) 研究業績の概要と研究計画（約2,000字）
 - (5) 教育実績の概要と抱負（約1,500字）
 - (6) 競争的資金獲得状況
 - (7) 照会可能者2名の氏名、連絡先(1)~(7)を2セット、以下の宛先に郵送のこと。
5. 締め切り：平成18年7月10日(月) 必着
6. 書類送付先：
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻
尾中 篤（化学部会主任）
(封筒に、「助教授応募」と朱書きし、簡易書留で送付)
7. 問い合わせ先：
松尾基之
Tei : 03 5454 6568
E-mail: cmatsuo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
参考：
<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/jpn/kyokan/koubo.html>
8. 付記：
 - (1) 応募書類は原則として返却しません。別刷等の

返却を希望される方は、応募時に申し出て下さい。それ以外はこちらで責任を持って破棄します。

- (2) 選考の過程において面接をお願いすることがありますが、交通費・宿泊費等は自己負担とさせていただきます。
- (3) 担当授業の例
 - ・学部前期課程：化学熱力学、環境物質科学、構造化学、物性化学等の化学系科目から年間2コマ。基礎化学実験の計画・改訂。
 - ・学部後期課程：システム測定学（分析化学系）、自然システム（環境化学・地球化学系）、システム基礎科学実習（地学・生物・化学のフィールドワーク）、システム基礎科学実験のうちの化学分野。
 - ・大学院：物質エネルギー循環論



院生による研究室紹介 No.2

北海道大学大学院理学院自然史科学専攻
角皆・中川研究室

亀山宗彦

地球化学をこよなく愛する皆様、いかがお過ごしでしょうか。今回で2回目となります本年度からの新企画「院生による研究室紹介」を執筆させていただくこととなりました、北海道大学大学院理学院自然史科学専攻博士後期課程3年の亀山宗彦と申します。僭越ではありますが、私が所属しております角皆・中川研究室についてご紹介させていただきます。

角皆・中川研はその名の通り、助教授の角皆潤（つのがいうるむ）先生と助手の中川書子（なかがわふみこ）先生の2名の教員、そのもとで日々研究に精を出している研究員4名、大学院生8名、留学生1名そして秘書さん1名の計16名（2006年4月現在）で構成されている研究集団でございます。まず我々が研究室の特徴として「若い」ということがあげられます。最年長（秘書さんは年齢不詳のため除く）の角皆先生でも30代。そのベビーフェイスもあいまって数年前までは大学院生に間違われていたこともあるのかないとか。話はそれてしまいましたが、何が言いたいかと申しま

すと角皆・中川研は「若く非常に活気のある研究室」であるということでもあります。研究室としても発足してまだ6年。研究の方向性も日々の活発な議論の中から生まれるような発展途上の研究室であり、毎年新しいことに挑戦しております。

さて、現在どのような研究をおこなっているのかということについて簡単に紹介いたします。先に述べました通り日々さまざまな新たな分野に挑戦しているのですが、角皆・中川研の一番の特徴として挙げられることは連続フロー型の質量分析計を用い、微量の試料で安定同位体比分析をおこなうことができる（出来なければ出来るようにする）ということでもあります。高精度の同位体データは物質の生成・消滅過程を知る指標として大変有用です。角皆・中川研ではこれまで主に大気中・海水中の微量気体成分（メタン、亜酸化窒素、一酸化炭素、非メタン炭化水素、ハロカーボン等）の同位体定量システムを開発してきましたが、最近では二酸化炭素の三酸素同位体組成、微量炭酸塩の炭素・酸素同位体組成、さらに硝酸の窒素・三酸素同位体組成の各測定システム等も構築しました。微量成分の測定には、質量分析計に導入する前に試料から測定したい成分を抽出・精製・分離しなければなりません、その作業をおこなう経路（これを通常「ライン」と呼んでおります）は自分たちで作成します。角皆・中川研に所属する学生のほとんどは、日々増えてゆくライン作りに参加しており、分析法の開発を通じていつの間にか微量気体分析のノウハウが身につくようになります（図1、図2）。

では、どのようなテーマを対象に微量成分の安定同位体組成を武器として研究をおこなっているか具体的に例を挙げますと、大気 海洋 陸域における各種微量気体分子の起源や挙動に関する研究、海洋フロンティア領域（深海底の熱水系やメタン湧出系、泥火山など）の開拓研究、海底下における始源的微生物活動に関する研究、海底堆積物やアイスコアなどを用いた過去の地球環境の復元に関する研究、など多岐に渡っております。またこれらの研究をおこなうために必要な試料は極力自分たちの手で採取することを心がけていて、毎年いくつかの研究航海などに参加して揺れる船の上で必死に試料を採取しております（図3）。また、試料採取装置も目的にあわせて開発しており、深海採水調査船で使用する保圧型海底湧水採取装置「WHATS: Water and Hydrothermal-fluid *Atsuryoku* Tight Sampler」は特許も取得しております。

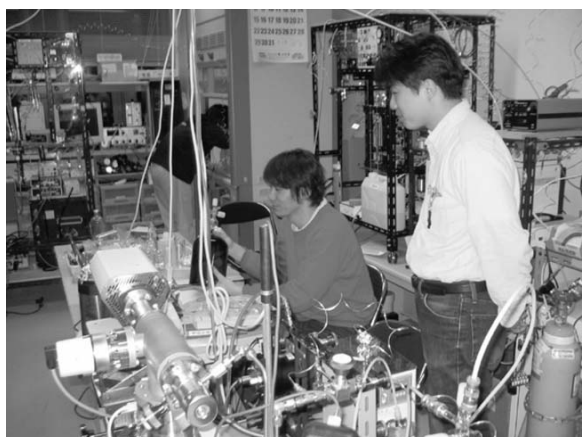


図1 多くのラインに囲まれての実験風景

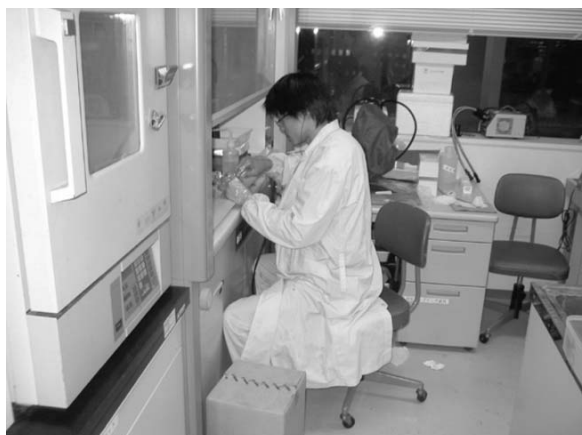


図2 ウェットラボにて



図3 昨年の研究航海でのワンシーン

長々と綴ってまいりましたが、よく「百聞は一見にしかず」といいます。何かのご用事で恋の街札幌にお越しの際は（角皆・中川研に行くという用事を作っていただくのもよろしいかと）是非覗きにいらしてください（図4）。他大学からの学生さんにも広く門戸を



図4 角皆・中川研メンバー全員集合（最後列一番右が角皆潤助教授，最後列左から3番目が中川書子助手，最後列右から2番目が筆者）

開いておりますので（実は私も他大学から来たのですが）お気軽にお越しください。また，毎年地球化学会の年会には研究室を挙げて参加しております。懇親会で妙に食事にへばりついている集団がいましたら，高確率で角皆・中川研の学生でございます。怖がらずにお声をかけていただくと幸いです。興味はあるけど声をかけるのはちょっと怖いという方は研究室のHP（<http://marchem.ep.sci.hokudai.ac.jp/index.html>）もありますので，是非ご覧になってみてください。

以上，簡単ではありますが角皆・中川研の紹介でございました。乱文失礼いたしました。



女性研究者に聞く No.2

産業技術総合研究所地質調査総合センター
地質情報研究部門研究部門長

富樫茂子

「研究分野は？」

地球化学・火成岩岩石学

「家族は？」

今は夫と二人暮らし。息子二人それぞれ自分の道を

探しています。

「アカデミックな道に進もうと思ったきっかけは？」

科学に興味を持ったきっかけは，壊れた家電製品を手品師のように直してしまう父のやっていることを，小さい時にじっとみていたことではないかと思えます。当時，技術家庭科は男子と女子にわかれており，学校で教えてもらえない「はんだづけ」などは父に教わりました。版画用の板に上に，エナメル線を巻いたりして初めて作った鉱石ラジオから音が聞こえた時の感激は今も覚えています。しかし，大学に行くことに反対していたのも父です。理由はなんと「お嫁にいけなくなる」というものです。中学時代にノートに「うちの親はなんて理解がないのか」と書きつけていました。結局受験が許されたのは，母が高校3年の担任に「今時，勉強するのに男も女もない」と一喝されて，父を説得してくれたからです。父が一度は研究者を目指していたのに，出征による中断であきらめたということを知ったのは，ずっと後のことです。

反対されたおかげで，高校時代は科学者とは何かについて，結構本も読み，その後の考え方の土台ができたような気がします。また，高校や大学の地学クラブの仲間と野山を歩いて議論したことも貴重な財産となりました。

「博士に進むときの家族の反応は？」

上記の経過があったので、父母は私が何をしても、すっかりあきらめて何も言いませんでした。修士課程に進むとき「奨学金がもらえたので仕送りはいらなから」と宣言してしまい、結構厳しい生活でした。その後学生結婚し、就職した夫とは別居のまま博士課程を過ごしました。いくつかの就職試験に落ちた後、幸運にも職を得ました。その後の子育ての時には、家族・保育園・児童館・学校・地域・職場、それに子供自身などあり得る限りの助けを借りることができたことを感謝しています。

「研究の中で印象に残るできごとは？」

恐山を最初のフィールドにして2年目の夏、どうしても理解できない真っ白な粘土層がありました。他大学の先生でありながら指導に来てくれた宇井忠英先生がこれを一目みて「降下軽石の風化したもの」と大変ショックを受け、次の日は野原で一日雲を眺めていました。教科書には書いていない自然を知った日です。

富士山のマグマの研究をはじめてしばらくたち、地質調査所の先輩の寺島滋さんが測定してくださった極微量の金の濃度のデータを見た瞬間、それまで私が測定していた他の元素とよい相関にあることに気づき、「おそらく私がそのことを認識した最初の人であろう」という感激を味わいました。自然に直に接する地球科学には、大なり小なりそのような瞬間が結構あるのが魅力ではないでしょうか。

「女性ゆえに損（あるいは得）をしていると感じることがありますか？」

女性であるという理由で、よくも悪くも目立ちます。失敗した時や力が不足したときは、女性であるためだとは思わないようにしてきました。女性ゆえに遭遇したことはたくさんありますが、たとえば短期的にみて損であっても得であっても、人生という長い目でみて、それが損であったか、得であったかはわからないのではないかと思います。

なお、自分では随分色々我慢してやりたいこともやらずに来たように思っているのですが、家族に言わせれば、家でも職場でも周囲の迷惑を顧みず、好き勝手にやっているとのことであり、そのギャップはすぐには埋まりそうにもありません。

「後輩に一言（女性研究者へのすすめ）」

私の世代は女性研究者の数があまりにも少なすぎます。ポテンシャルがありながら、それを活かすチャンスに恵まれなかった人がたくさんいたということでしょう。しかし、20年前の機会均等法の時期に大きな前進があり、これからはその世代の人がリードしていけるはずです。さらに男女共同参画社会が世の追い風になっている現在、これからの若い皆さんは、男であったり女であったりすることが、何かをするときの障害にならない社会で活躍できるのだと期待しています。

一方で、男女問わず、任期がついたり、短期間の業績を問われたり、研究者の育成にとっては以前より厳しくなっている現実を何とかする必要があると思っています。これからも、いろいろあると思いますが、皆さんは、研究を始めた時の気持ちを忘れず、たとえ困難であっても次の糧に変えて、世界に羽ばたいてください。



書評

『現代放射化学』 著者：海老原 充
出版社：化学同人 B5版 224ページ
2005年12月10日発行 3,000円＋税
ISBN 4 7598 1044 7

本書は、主に学部学生が放射化学を勉強するために書かれた教科書である。著者の海老原さんは、現在首都大学東京大学院理工学研究科の教授で、宇宙化学・惑星化学の研究の第一人者であるが、長年「放射化学」の講義を行ってきた集大成が本書となった。学部の授業で使う教科書が扱う内容は、どの教科書をとっても大差ないが、同じ内容でも書く人が違うと、こうも読み終わったあとの満足度が違うかということを感じた。「放射化学」の場合も、おおむね原子核や放射性核種、放射能の基礎から始めて、核反応や物質との相互作用、測定法と続き、その応用として原子エネルギー利用、年代測定、放射化分析などが定番で出てくる。本書の内容はこのような構成からおおむね逸脱しておらず、新しい点としては「核反応を誘起するための粒子源」を独立の章としてまとめている点

であろう。

本書は、教科書はこうあるべきだと言う、教育的な工夫が随所に現れていて、著書の海老原さんの教育者としての姿勢の素晴らしさを示していると思われる。記述が明快、正確で、初学の読者の立場に立った分かりやすさが、最初から最後まで貫かれている。たとえば、本書は各ページの2/3が本文に充てられ、残りの1/3が活字を落として注釈に充てられているが、その注釈が実に巧みに使われ充実していることである。本文だけでは十分説明しきれない概念や用語を歴史的な背景や類似の概念との違いを明確に説明するのに使われたり、式の展開を示すのに使われたり、ともかく素晴らしい注釈である。また、式を使って数値を求めるところは、途中の計算もしっかり書いており、数式が苦手な読者が安心してついていける。何より主要な用語には英語名がつき、あわせて正確な説明が分かりやすく的確にされているのは、教科書としてこれほど助かることはない。その中で歴史的な記述が多く出てくるのは、楽しく読める要因となっており、海老原さんの博識に感心するばかりである。図もできるだけ分かりやすく心をかけており、一つの図にいろいろな情報を重ねて載せないのは好感が持てる。さらに各章の最後に書かれている練習問題は是非理解の目安に解いて欲しいものばかりである。最後に、全体が13章になっているのは明らかに2単位の授業の1回ごとの内容を

意識しており、教える側の人が使っても便利のように構成されている。

教科書となるとなかなか最新の成果が盛り込めないが、本書はそうではない。自らの不勉強を反省した一例を挙げると、私はこれまで授業で天然に存在する最も原子番号の大きい安定元素をBiと教えてきたが、²⁰⁹Biは半減期 1.9×10^{19} 年の放射性核種であることが2003年に分かったことをはじめて知った。今年の授業からは天然に存在する最も原子番号の大きい安定元素はPbと直さねばならない。地球化学の立場からすると、放射化学の地球・惑星化学への応用の部分が年代測定や各種分析の方法論の記述にとどまっているのは、少し不満である。海老原さんという誰もが「元素の宇宙存在度」の研究を思い浮かべる。第13章で元素合成まで出てきて、「元素の宇宙存在度」の議論が殆どないのは、「放射化学」の教科書の性格上やむを得ないのかも知れない。むしろ海老原さんが、本書と同じような発想で、次に「地球化学」とか「宇宙化学」の教科書を書くことを期待したい。

地球化学を学ぶ学生、教える教師にとって、放射化学の知識は欠くべからざるものである。それを分かりやすく伝えている本書は、教える側にも教えられる側にも是非薦めたい書物である。

(東京大学大学院理学系研究科・野津憲治)

訃報：五十嵐丈二会員の夭折を悼む



東北大学大学院理学研究科五十嵐丈二教授は、2006年3月24日にご逝去されました。46歳の若さでした。ここに慎んでお知らせします。

五十嵐さんは1959年に群馬県伊勢崎市に生まれ、県立前橋高等学校卒業後、1978年に東京大学教養学部理科類に入学しました。子供の頃の天文少年の夢をそのままもちつづけ、理学部天文学科を卒業後、大学院理学系研究科地球物理学専攻に入学し、小嶋研究室で研究生活がスタートしました。博士課程の途中の1988年1月に理学部附属地殻化学実験施設の助手に採用され、1993年8月に広島大学理学部地球惑星システム学科の助教授に昇任、1995年11月には東京大学理学部附属地殻化学実験施設の助教授に転任、2003年11月に東北大学大学院理学研究科附属地震・噴火予知観測研究センター（火山噴火予知観測研究部門）の教授に昇任されました。

五十嵐さんは、この間、地球惑星科学のいろいろな分野の研究を勢力的にこなされました。さっと思いつくだけでも、地球に関する研究では、地下水中のラドン濃度や「フラクタル」に関連した理論を使った地震予知の基礎研究、キセノン同位体に基づく大気の起源と進化に関する研究、惑星科学の研究では、すばる望遠鏡を使った小惑星表面組成の研究、6,500万年前の天体衝突の際放出した蒸気雲の

化学組成推定の実験的研究などが上げられます。1993年10月には「地震予知の基礎に関する地球化学的研究」で日本地球化学会の奨励賞を受賞しました。五十嵐さんは、どれ一つとっても難しいこれらの研究をどれもこなせる極めて稀な頭の切れを持っていたように思います。東北大学に着任した時に学内誌によせた文章に次のようなくだりがあります。

「(略)私のこのような研究スタイルは、大学時代に器械体操に打ち込んだ経験も影響しているのかもしれない。ご存知のように、床運動、鉄棒、吊り輪、鞍馬、跳馬、平行棒と6種目こなさなければならぬスポーツですから、(略)その楽しみ方は千差万別です。科学研究も、『多くの種目の自由演技』で自分を表現できたら、きっと楽しいと思っています。(略)」

五十嵐さんは東北大学へ移り2年と少したちましたが、平成17年度には観測研究センターの中で新しい地球化学観測システムを立ち上げ始め、この4月からは新しい大学院生も加わって、新天地でまさに未来に向かって羽ばたこうとしている矢先でした。本人の無念さはいかばかりか、何とも表現のしようがありません。五十嵐さんなら誰も思いつかない何か素晴らしい研究をするに違いないと、私を始めとして誰もが期待していました。本当に本当に残念でなりません。五十嵐さんは凡人が何年もかかることを次々と早く仕上げ、生き急いで冥界へ旅立ちました。そこは現世のようにいろいろながらみはなく、地球惑星科学の6種目を楽しんで、6種目とも金メダルを取るのではないのでしょうか。五十嵐さんのご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

(野津憲治)

165 mm

講演番号記載
スペース (空欄)

10 mm

講演題目

○ 日本太郎¹、東京花子²、海洋三郎²

(¹日大文理、²東大海洋研)

40 mm

25 mm

講演要旨作成上の注意

- 1) フォントはできるだけ明朝体を使ってください。
- 2) 原稿は、**B5** 版になります。文字が小さくなりすぎないように注意してください。
- 3) 枠は範囲を示しているだけです。書く必要はありません。
- 4) A4用紙に上部 31 mm、下部 30 mm、左 22.5 mm、右 22.5 mm のマージンを設定してください。
- 5) 研究題目、発表者、ならびに所属は例示に準じて記入し、講演者の左側に○印をつけてください。講演題目などに関する英文標記についても同様です。
- 6) 左上の講演番号を印刷するスペースは必ず空けておいてください。
- 7) PDF ファイルで送るため、300 kb 程度のファイル容量で作ってください。
- 8) 一般講演は、要旨 1 ページ、課題講演は 2 ページまで。
- 9) 原稿は、プリントして正常に印刷できるかご確認の後送ってください。
- 10) 講演要旨の締め切りを厳守してください。

190 mm

Theme title

○ T. Nihon¹, H. Tokyo², S. Kaiyo² (¹Nihon Univ. Coll. Hum. Sci., ²ORI, Univ. Tokyo)

20 mm

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人事公募，書評，研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2006年8月頃を予定しています。ニュース原稿は7月中旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

山本鋼志

〒464 8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院環境学研究科
（理学部気付）

Tel/Fax : 052 789 2522

E-mail: news-info@geochem.jp

南 雅代

〒464 8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学年代測定総合研究センター

Tel : 052 789 3091

E-mail: new-info@geochem.jp